

推薦文

文化科学研究科・国際日本文化専攻・助教 光田 和伸

岩井茂樹君の論文「恋歌の歴史―江戸時代を中心に」は、次のような問題意識から成っています。

日本文学の歴史を通じて、まず真先に栄えたものは和歌を中心とする韻文形式であり、さらに、そのうちで質量ともに最も重要なものは恋歌である。和歌はこの後、歌物語を経て源氏物語のような王朝物語文学を生み出します。また和歌はこれに並行して、連歌、俳諧など、様々な韻文形式を派生します。中世初頭にあたる鎌倉時代まで、和歌とその生み出した諸ジャンルにおいて、「恋」の表現は表行為の核心をなすものでありつづけました。しかし、中世期において、「恋」の表現が担っていた地位は次第に揺らぎ、近世初頭の江戸時代には、これを忌避しようとする動きが明確になります。明治以降の近代においても、この傾向そのものは残り、和歌の後継形式である短歌においては、現代までに何度かの「恋歌」創作および享受の高まりはあるにせよ、再び鎮静とも沈滞ともいふべき「恋歌」低迷期に帰ってゆくという傾向を否定できません。中世期に萌芽し、近世期に茂り、近現代にも、なおその影を落としている「恋歌忌避」は、どのようにして出現したのか。中世期初頭まで、恋歌に対する愛着は、日本古典文学において最も顕著な特質の一つでありつづけたのですから、中世期に「国民性」が変化しはじめたと考えることもできる。しかし、果してそれは「国民性」の変化であったのだろうか。この論文の主題の深さは、その点にまで届いています。

筆者の取った分析手法は入念です。まず、恋歌が盛行していると思われる王朝期の勅撰和歌集においてさえ、既に一連の恋歌の最後

を「恨み」で結論づけるといふ変改が行われはじめているという指摘がなされます。これは「恋」という行為に、ある種の「気後れ」を招来していった可能性があります。次に、恋歌が次第に「題詠」となり遊戯化してゆくさまが指摘されます。これは「恋歌」が恋の現場での実用から次第に遠ざかってゆくことを示しています。或いは、「恋歌」を恋の現場での実用にはしない階層が作歌行為に参入してきたことを示しているでしょう。第三に、近世期に力をふるった儒教、ことにそのうちの朱子学の影響が指摘されます。それは先ず、「女の恋」を制度の内に囲い込もうという企図のもとに、女が恋歌を詠むことへの批判に始まります。近世末期から近代にかけて次第に男に対しても同種の批判が顕在化します。明治期に多種多様に刊行された「恋歌」抜きの「百人一首」という、ある意味で「畸形」というほかない作品が紹介されます。

この論文の成果は以上の新しい分析手法から導き出されています。まず、王朝期から説き起こして、江戸期、近代までの通時的な分析を行うことにより、この問題に関する視野の全体像を初めて提示することに成功したこと。第二に、「恋歌」を担う階層の交替に注目したこと。第三に、儒教を中心とする思想史の変化が、作歌という営為に少しずつ、しかし払いがたい影響を、及ぼしていった可能性を、資料に即して分析してみせたこと。これらは、実に、この論文において初めて明確に考察され、主張されたことです。

以上、この論文の画期的であることを述べて、推薦するものです。